

# 好きな遊びを中心とした保育を充実させるためのサークルタイム

——個と個を集団へとつないでいく保育者の援助——

## Improving Childcare Based on Play and Voluntary Activities: The Importance of Circle Time

児童学科 請川 滋大  
Dept. of Child Studies Shigehiro Ukegawa

**抄 録** 現在、日本を始め世界の国々が、いかにして「保育の質」を高めるかということに力を入れている。そういった状況の下で、遊びを中心とした保育を行う園ではどのようにして「保育の質」を高めていけばよいのだろうか。これらの園では幼児がそれぞれ好きな遊びや活動を選択しているため、一人一人の子をしっかりと理解することが難しい。また、幼児それぞれが活動を選択しているために、学級全体で共通のテーマに取り組むためには何らかの工夫が必要だ。この研究では、幼稚園の5歳児クラスを観察対象とし、教師が多くの幼児の話題をどのようにして学級全体の話題にしているのか観察研究することにする。そして、学級で行われているサークルタイムの意義の重要性について述べていく。

**キーワード**：幼稚園、5歳児クラス、サークルタイム、好きな遊び、教師の援助

**Abstract** Today, various countries, including Japan, are seeking to improve the quality of their childcare. One element of this discussion is how to improve the quality of childcare in venues providing voluntary and Play-based activities. In such venues, children select individually and voluntarily which activity to engage in. As a result, it can be difficult for teachers to cater individually for each child. Moreover, teachers consequently need to use their ingenuity when gathering such children into single class activities. In this study, we observed a group of five-year old children to discover how teachers transition from individual to whole-group activities. We also discuss the importance of 'circle time' in classes.

**Keywords:** Kindergarten, 5 years old child class, circle time, favorite play, help of the teacher

## 1. はじめに

### 1-1 問題意識

2012年に成立した子ども・子育て関連3法により、「子ども子育て支援新制度」(以下、新制度)がスタートした。この制度のポイントは大きく分けると4つ<sup>\*1</sup>ある。1つは、幼稚園・保育所の機能を1つにした認定こども園の普及、2つ目が待機児童を減らすために保育の場を増やす、3つ目に幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量と質の拡充、そして最後の4つ目が少子化が進んでいる地域の子育て支援も充実させる、という点である。この中で、

幼稚園教諭の養成校教員として気になるのは、1番目の認定こども園の普及と、3つ目の幼児期における学校教育の質と量の拡充という点である。

まず始めに認定こども園の普及という点についてである。認定こども園は2006(平成18)年の10月から制度が始まった幼稚園・保育所に次ぐ乳幼児のための第3の教育・保育施設だが、2008年からの5年間で2000園を整備するという当初の計画は達成されなかった<sup>\*2</sup>。それは認定こども園の中の幼稚園部門の所管が文部科学省であり、保育所の所管が厚生労働省になっているという縦割り行政の悪しき側面が出た結果であり、園側としては申請や報告など

がとても煩雑だったという現実がある。

そんな状況の下、内閣府が所管となって新しい認定こども園制度がスタートしたのがこの2015年の春である。制度が整理され、かつ消費税増税を見込んで7000億円とも言われる予算がついたことにより、新・幼保連携型認定こども園に移行した園は人件費など金銭面で優遇されることとなった。そのため、2014年4月の段階で全国に1360園までしか増えなかった認定こども園であるが、2015年4月には2836園となり倍以上の増加となった<sup>43</sup>。

さて、その新しい幼保連携型認定こども園（以下、こども園）の設置に伴い、その根本法となる子ども・子育て新システムの関連3法をベースに、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（2014）が公示された（以下、教育・保育要領）。教育・保育要領は、これまでの幼稚園教育要領と保育所保育指針の文言を活用しながら新たに作られたのだが、その中で特徴的なのは「教育」と「保育」という言葉を明確に分けて用いているところである。これまで幼稚園の実践場面でもその教育活動について、「保育」という言葉を用いることが多かったが、今後3歳児以上に対して行う教育活動については、より「教育」という言葉を意識して用いることになるだろう。ここでいう「教育」とは、学校教育法に定められた教育のことであり、家庭教育などとは異なる意味で用いられている。つまり「教育」とはいいつつも、それは「学校教育」を表していることになる。しかし当然ではあるが、幼稚園やこども園で行う「(学校)教育」は、小学校以上の学校に見られる教科教育を中心とした学校教育とは大きく異なるものである。

これまでも幼稚園は学校教育としての「教育」を提供する場として機能してきたが、自発的な活動としての遊びを中心とした保育を行っていく中で、学校教育を提供するとはどういうことかを見失ってきた側面もある。それは、遊びは自発的な活動であるから、子どもたちが自己発揮し好みに遊んでいればそれで良いという誤った理解から生じるものであった。これまでと同様に、教育を提供する場としての幼児教育施設（幼稚園やこども園）、中でも3歳児以上においては、「学級による集団活動」を通して「遊びを中心とする園児の主体的な活動」（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2014）を行うことが教育活動の中心となる。ここで「学級」や「集団

活動」というのがより意識的に用いられたのは、計画的な教育とはそれぞれ子どもたちを個人単位で野放図に遊ばせておくことではないということの表れだろう。担任教諭は、学級や集団という単位を基本として担当する子どもたちを責任持って理解し、その上で彼らに必要な環境や人的な援助を提供することを検討しながら計画的に教育を進めることが求められる、ということを示したいのだと理解する。

さてこのような前提に立った場合、担任教諭は学級や集団という単位で子どもたちの人間関係を意図的に形成していくことが望まれる。とりわけ小学校に上がる前の年長児の1年間は、学級集団としての協同経験を積んでおくことが就学前と小学校との接続という意味においても非常に重要となってくる。

本研究では、日々の活動の中で担任がいかにして学級集団を形成しているのかという点に焦点を当て、担任が子どもたちと共に行う集まりの場面を、イギリスを中心とした欧米で行われる「サークルタイム」と照らし合わせながら、その機能や役割について分析していきたい。

## 1-2 「サークルタイム」(circle time) とは

サークルタイムとは、イギリスの小学校など英語圏の初等教育を中心によく用いられる教育方法の1つである。子どもの主体性や協調性、話す力や聞く力を育むために用いられるもので、子どもたちは大きな輪(circle)になる。同じ輪に入っている担任教諭もしくは子どもの中の1人が司会進行をし、司会者の指示によって子どもたちは発言したり、仲間の話に耳を傾けたりする。サークルタイムで行うことは、基本的には学級全体に関わるテーマについての話し合いだが、時には集団の雰囲気を良くするためのゲームなどが行われる場合もある。

ところで、就学前の教育・保育を見渡した時、世界には2つのタイプの保育が存在している。OECD保育白書(2011)ではその2つのタイプを、①就学準備や学校へのレディネスを重視するタイプ(以下、レディネス・タイプ)と、②ケア・養育・教育に対してホリスティックなアプローチをとるタイプ(以下、ホリスティック・タイプ)とに分類している。レディネス・タイプの国々は、就学前の1年間を小学校へ入学するための準備教育と位置付けており、小学校教育の基礎となる力を育成することを目指している。レディネス・タイプの国はアメリカやイギ

リス、フランスなどの国々である（北村，2013）。

図1は、アメリカ・ニュージャージー州の公立小学校に付設する幼稚園（Kindergarten）の様子である。教師がボードに定型文を提示しながら、空欄にどういった言葉が入るかを授業形式で行っている場面である。

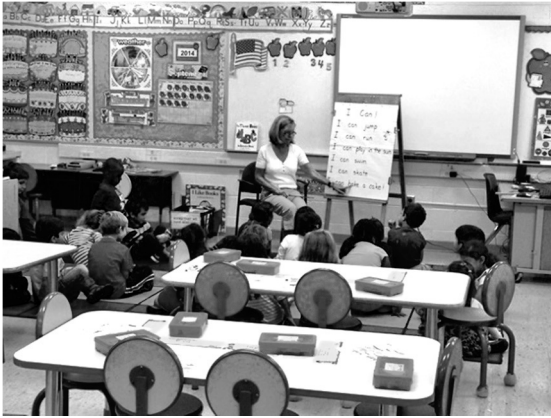


図1 レディネス・タイプ（アメリカ）

一方、ホリスティック・タイプの国では、就学前の期間を教育だけではなくケアや養護といった意味合いからも捉えており、学習面だけではなく総合的な育ちという側面から幼児の発達を期待している。こちらのタイプの国々はドイツやスウェーデンといった主にヨーロッパ北部を中心とした国々である<sup>4</sup>。

図2はスウェーデンのリンショーピン市（Linköping）にある私立園（Förskola）の保育室内であるが、ボードの下部には世界地図があり、そこには様々な野菜が矢印と共に貼り付けられていた。これは「食べ物はどこから来るか」というプロジェクト活動で



図2 ホリスティック・タイプ（スウェーデン）

用いた地図とのことであった<sup>5</sup>。

レディネス・タイプ、ホリスティック・タイプいずれの国々でも、サークルタイムや、それに代わるような集まりの場面は存在する。日本の幼稚園教育要領で目指す教育像はホリスティック・タイプに近いと感じられるが、実際にはレディネス・タイプの教育を行っている園も非常に多い。だが、どちらの園にも集まりの場面は存在し、だからこそ幼児教育を考える際にそういった集まりの場面やサークルタイムがどのように運営されているかを見ることが、今後の幼児期の教育を検討していくに当たって非常に重要なポイントだと筆者は考えている。

## 2. 研究の目的

観察を行っている千葉県内のA幼稚園は、中規模の、自然豊かな園庭のあるキリスト教（プロテスタント）主義の私立幼稚園である。こちらの幼稚園では子どもたちの自主的な遊びや活動を大切にしており、園の生活の中で「自分で考えて行動する」という自発性の育ちに価値を置いている。教師が一方的に「今日はこれをしよう」と子ども遊びや活動を決めるのではなく、各々の子どもが好きな場所、好きな遊び、好きな仲間を決定しながら一日を過ごしているのが特徴である。A幼稚園では、子どもたちが主人公であると考えているので、子どもたち自身が「生活を作り出していく」ことを大切にしている。

幼稚園の敷地内には様々な遊具があるが、ほとんどの遊具は手作り遊具である。子どもの遊びを思い、子どもの発想や教師の力をひとつにすることで作られた遊具となっている。また、もうひとつのA幼稚園の特徴は、子どもたちは学年に関わらず交わって



図3 壁のない保育室

（手前が年長クラス、奥が年中クラス）

遊びを繰り広げているということである。学級は年少、年中、年長と学年別に分かれているのだが、好きな遊びを中心とした保育を行っているので、遊びの時間は学級に関係なく異年齢の子たちとも遊んでいる。特に年長と年中はペア学級となっており、子どもたちは壁の無い保育室の中で生活を共にしている(図3)。

こういった環境を活かしながら、子どもの自発性を尊重した遊びや保育活動や大切にしたい幼稚園である。このA園の年長児クラスをフィールドに、普段の幼稚園での生活を記録し、担任教師と子どもたちの間でどのようなやりとりが行われているのかについて、エスノグラフィックに記述することを目的とする。またサークルタイムと酷似した集まり場面を

観察することで、教師と子ども、また子どもと子どもとの間にいったい何が起きているのか。この場面にはどのような意味があるのかについて考察を加えていきたい。

### 3. 研究の方法

A園をフィールドに研究活動をしている大学教員は比較的多く、常日頃より外部の観察者が訪れているのだが、子どもたちもそういった観察者に慣れており、園側は研究活動に対して非常に強力的である。筆者が主に観察したのは年長児β組で、担任教師は50代のベテラン男性教諭である。観察を始めた2013年10月時点でのβ組の園児数は24名であった。観察回数と時間、そして大まかな保育内容は表1に示す。

表1 観察回数・時間と主な活動内容

観察年月		回数	総観察時間(分)	当該月の主な活動
2013年	10月	4	606	運動会
	11月	2	327	イモ掘り, カレーパーティー
	12月	2	234	降誕劇
2014年	1月	3	758	絵本作り
	2月	3	327	お別れ会の準備(お化け屋敷, レストラン)
	3月	1	327	お別れ会(お化け屋敷, レストラン)

観察はデジタルビデオカメラを用いて、朝から帰りの時間まで、集まり場面だけに限らず遊び場面や学級全体での活動場面も記録している。特に帰りの会を中心に、集まり場面は必ず記録するようにしている。それに加え、フィールドノーツをつけながら、デジタルカメラを補完的に用いて静止画も撮影している。

### 4. 観察結果と考察

β組を含め、対象園では「サークルタイム」という言葉を用いてはいない。しかし、集まりの場面において行う話し合いは、サークルタイムの運営の仕方、その活動内容と非常に似通っている。その共通

点を後半で整理しながら示したい。

かつて行った「帰りの会」の研究(請川・山口, 2008)では、教師からの発話には振り返り、説明、連絡などあることが分かっている。しかし、どれも教師から子どもという一方通行の言葉のみで進めている会や、他方、問いかけを上手に用いた対話的な会を行っている園などそのバリエーションが見受けられたが、円形に座って行う所はなかった。また現役の幼稚園教諭に質問紙で尋ねた先行研究では(請川, 2009)、当初は年長児ほど教師とのやり取りに時間をかけているため、会そのものに時間を長く使っているのではないかと考えたのだが、実際は年少児ほど時間がかかっていたというのが意外であっ

た。それは、対話的な関係を意識してのことではなく、帰りの支度に時間がかかるためにトータルの時間が年少児ほど長くかかってしまうという単純なものであった。向き合いながらじっくり話し合いをするということよりも、お迎えの時間や帰りのバスの時間を意識せざるを得ないので、何となくシンプルに終わらせている様子も垣間見えた。

ところが、A園β組の集まり場面では、じっくりと時間を取って話し合いをすることが多く、集まり場面でのやりとりに価値を見出しているように感じた。園の紹介のところでも書いたように、A園では子どもたちの自主性を尊重しているので、そのためには教師として子どもの意見を聞きだし、さらには子ども同士で話し合う時間を確保しなくてはならないからであろう。またそのことに大きな意味を見出しているということでもある。

それでは、以下に一般的なサークルタイムとA幼稚園年長β組の集まり場面の共通点を示しながら、事例を考察していきたい。

#### 4-1 円形になって座る

β組では、担任が集まりを開始する声をかけると、子どもたちは自分でイスを持ってきて1つの大きな円形を作り座る(図4)。子どもを表す円の濃淡は男女の違いを示しており、濃い円が男児、薄い円が女児である。後半の時期には、保育室に早めに戻ってきた子ども達数名が担任から依頼され、学級全員分のイスを並べることもあった。座る形が絶対的な条件ではないが、この円形に座るというスタイルがその場のもつ意味を表している。

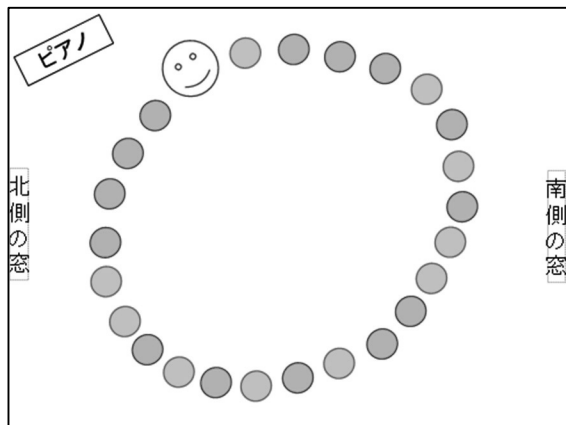


図4 集まり場面の基本的な座り方

β組の担任教師は、子ども達と何か相談をしたり話し合いをする場面(対話的場面)では円形に座るよう指示することが多い。担任が言葉を投げかけた時に、子どもたちがそれに応じ易く、またその状態を子ども同士が「互いに見える」関係を作るためである。

他方、絵本を読みみかせる、何らかの説明を子どもたちにするというような場面(対峙的場面)では、担任の正面にイスのない状態で子どもたちを座らせている(図5)。担任が全員と目が合う状態で話ができるよう意識しているからである。

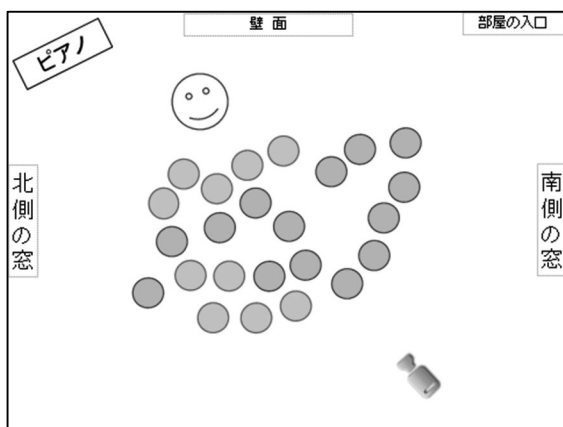


図5 読み聞かせの時の座り方

このβ組の担任は集まり場面で、「問いかけ」をよく用いるという特徴がある。またその問いが、オープンエンド形式になっているため、クラス全体が担任の問いに対して耳を傾けるという姿勢が次第に形作られてくる。観察日である秋の頃には、そのような構えがすでに出来つつあった。

問いかけの形式については拙稿(2013)でまとめているが、問いに対して答えが無数にある、つまり回答がオープンになっているものを「オープンエンド形式」の問いとし、一方で、答えが「はい(Yes)」か「いいえ(No)」でしかない問いかけを「クローズドエンド形式」の問いかけとした。クローズドエンド形式の問いは、日本の園においてはよく行動修正場面で用いられる。例えば教師が、「いまお話しする時間だっけ?」と問いかけた場合、幼児側の答えは「はい」か「いいえ」しかないのだが、こういう場合の問いはたいてい「いいえ」でしか答えられないようになっている。つまり、最初か

ら「いいえ」という答えを想定した問いであり、本来の自由な回答が用意されている問いとは根本的に質が異なるものである。

しかし、オープンエンド形式の問いは、回答が無数に存在するため教師と幼児の間に対話的な関係を形成するのに効果的である。オープンエンド形式の問いかけの課題は、問いが難しくして幼児が答えられない場合があるということなのだが、これも教師側が言葉などで援助をしながら幼児の発言を引き出すようにすれば可能である。

#### 【トランスクリプト 131106-001】 芋ほりの手伝いで大変だったこと

- 01 T: 今日のお世話、どうでしたか?①  
 02 C: 楽しかったー  
 03 T: 楽しかった人? (手をあげる) (手をあげる子が数名)  
 04 T: あー、そうですかー。じゃあ手を下して。他に?  
 05 YK: 疲れた①'  
 06 T: 疲れた。何が疲れた?①''  
 07 YK: (2秒の間) みんなが止まったり動いたり、止まったり動いたり…  
 08 T: あー、誰のお世話をしましたか?  
 09 C: YMでしょ?  
 10 YK: YM。  
 11 T: ツバキの YM くん、止まっちゃうの? (YKの方ではなくみんなの方を向いている)①'''  
 - 中略 (YKにどうやってYMのサポートをしたか聞き、YKとやりとり) -

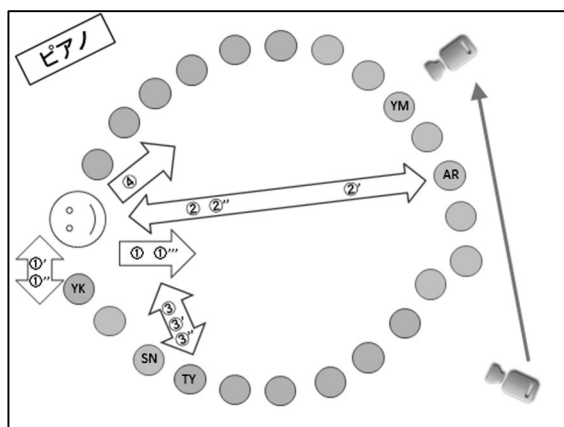


図6 芋ほりの手伝いで大変だったこと

- 12 T: そっかー、お、ARさん、どうぞ②。  
 13 AR: あのね、お世話が大変だった②'  
 14 T: どんなことが大変だった、具体的に教えて②''  
 - 中略 (ARが事細かに説明する、Tはそれを聞いている) -  
 15 T: そうー、分かりました。じゃあ、TY③  
 16 TY: あのねー、(5秒ほど間) YHくん  
 17 T: はい?  
 18 YK: YH!  
 19 T: YHのお世話したの?③'  
 20 TY: YHさ、走ったり歩いたり、走ったり歩いたり…③''  
 21 T: YH、元気だったかな?④

#### <考察> 1対1のやりとりをクラス全体のテーマに移行する

波線部①でクラス全体に問いかけを行ったのだが、いつもよく発言するYKが①'でTに向かって答えている。しかしTは、YKとのやりとりの途中からそれを再度クラスに話題を投げかける(波線部①'')きっかけとしている。こういった「声の方向づけ」を行うことで、やりとりが個別にならず話題がクラス全体に広がっていく。②をきっかけとしたARとのやりとりは、ARの話をじっくり聞くというねらいを持って2人でしばらくやりとりを続けていた。

次に、普段はあまり発言しないのだが、よく手を挙げるTYを指名している(波線部③)。TYは手を挙げてはみたものの、自分でどう話していいかわからず、途中でブランクが生じる場面もあった(16の下線部\*)。しかしその後、先ほどのYKと同じように説明をしている(下線部③'')。そのYKの発言を通常ならばYKに戻すか、もしくは全体にその内容を返す、つまり「リヴォイシング」(一柳, 2009)をすることであるが、Tはここで反対側にいる男の子たちの方を向いて「YH、元気だったかな?」(波線部④)と話をしている。これは、何人かが比較的時間をかけて手伝いの大変さを語った後のことであり、指名されていない幼児たちはちょうど意識が逸れてきた頃に当たる。その時に、意識が逸れそうな子へ何気ない問いを投げかけたものと考えられる。

担任が話題を投げかけた時、それに答える子はどうしても同じ子どもばかりになりがちだが、ここで

は、意識して普段発言していない子にもチャンスを与えるようにしているのが分かる。また、誰かが発言している時には他の子の発言にきちんと耳を傾けるよう意識づけるような言葉がけも見られた。こういった経験の積み重ねにより、「発言の順番どりが出来るようになる」ということへつながるのである。

#### 4-2 良い「質問」と「探究」の深まり

サークルタイムでは哲学的な問いから探究を始めたりする（竹本・田中，2011）が、β組ではより日常的な課題をテーマに学級全体で探究をしていっている。例えば運動会のリレーの練習後に見られた「どうして負けてしまうのだろう」という担任の問いかけに対して、「人数が違うから」「バトンの渡し方が悪い」などという意見が出てくる。そこをきっかけに議論が深まるという場面が見られた。より自分たちの生活に結びついた、また共通の問題意識である問いだからこそ、子どもたちも真剣に考えようとするのではないかと考えられる。こういったやりとりの際、発言が多い子、どちらかと言えば言葉がしっかりした子なのだが、こういう子達には周りの子にも分かるようなより分かりやすい説明を求めることもある。

【トランスクリプト 131009-002】バトン渡しゲームに関するやりとり

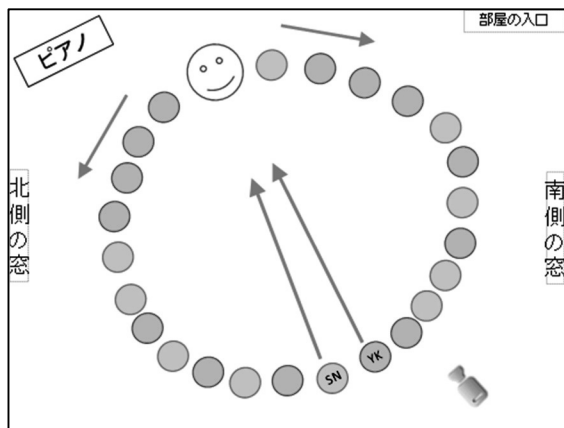


図7 バトン渡しゲーム

01 YK：ねー、ちょっと待って。先生さー、こっちの方が絶対に少ない（左のチームを指

さしながら）

- 02 TM：少なくないと思う
- 03 SN：じゃあ、イチ、ニ、サンってやればいいじゃん
- 04 T：じゃあSN、やって  
(SNとYKが互いに数字を数え上げるので、なかなかきれいに揃わない)
- 05 T：今さ、HNが10で立てなかったの、なんでだ分かる？①
- 06 Cら：SJが2回走るから①'
- 07 T：すごいね、HN。SJはリレーの時は横に入るから、今日はちょっと考えたんだよね①''。分かった。実際にいるのは10人だから、HN、10で立ってみて。11…、12対…
- 08 YK：13（本当はYKが12番目だが間違えている）。だからさ、そっちの方が全然強いに決まってるでしょ。だからさ、ズルしたから4対4になっちゃうんじゃない②
- 09 T：じゃあ、ちょっと待ってください。RT、ちょっと座って。いま12対13になった人いる？②'
- 10 YK：うん。SNがさ今12でさ、こっちは13人いるんだよ③
- 11 T：YKが言うのは、Aチームが13人いて、Bチームが12人いるって言ったよね③'。みんなもそう思う？Aチームが13人いると思う？Bチーム12人いると思う？（うなずいている子もいれば、首を傾げている子もいる）

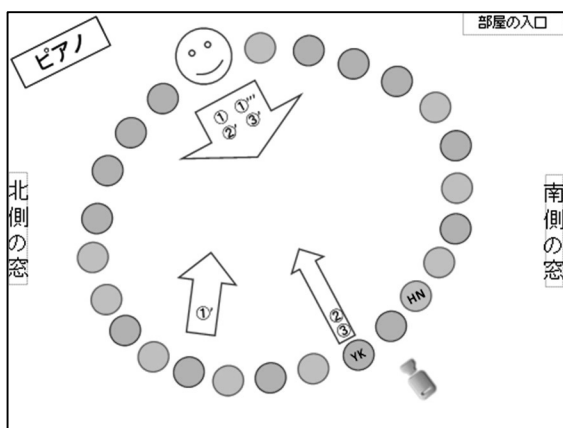


図8 人数が違うと問題になった時

### ＜考察＞良い「質問」を「探究」のきっかけにする

運動が近づいたこの日、サークルタイムの時にバトン渡しのゲームを行った。Tは2本のバトンを持ち、それを両サイドの子に同時に渡す。そこから矢印の方向へバトンを手渡していき、最後に受け取ったSNとYKはそれをTのところへ戻しどちらが速いかを競うゲームである。Tは何気なくバトンを差し出すので、最初に受け取る子は意識を集中してはいなくてはならない。また反対方向に回す時もあるので、その場合はSNとYKが取りに行くことになる。何度かやっているうちにYKのいるチームの負けが込んできた。YKはそのことをTに訴え、チーム別に人数確認をするよう求める。Tの両サイドから順番に立ち上がり人数確認をしていたところ、10番目のHNが立つのに躊躇した。このことをきっかけにTは全員に問いを投げかける（波線部①）。それが結果的に、運動会におけるリレーの順番を再確認することになった。その後もYKは納得がいかず、Tやクラス全体に訴えかける（下線部②③）。それを受けたTはYKだけではなく、そのことをクラス全体に返し、皆に「何人ずついるか」を共通の問題意識として問いかけている（波線部②'③'）。つまり、1人から発せられた問いや訴えをクラス全体の共通の問題とし、それを皆で確認するというところを行っているのだ。こういった行為の積み重ねが、たまたま一緒になったメンバーをある課題意識をもつ集団にしていくのだろう。

## 5. 全体考察

日本の幼児教育においては、未だサークルタイムという言葉は一般的ではない。しかし、質の高い集まりを行っている学級においては、その集まりの場面がサークルタイムと非常に似通った役割を果たしていることが分かった。集まりの場面で、担任が意識的に質の高い「質問」をすることで、そこからより深い「探究」の場を構成すること様子を垣間見ることができた。

一方で、好きな遊びを中心とした園ではそれぞれの活動が異なるので、学級全体に共通したテーマが自ずと生成されるわけではない。共通したテーマを生み出すには、担任教師の話題の取り上げ方や、また学級が一体となって取り組む「課題」（共通のテーマ）が必要だと感じる。好きな遊びを中心としながらも、プロジェクトのような協同的な活動を意

識して教育・保育を行うことで、サークルタイムの場の構成もより充実したものになると考えられる。

### 【注】

- (注1) 「子ども子育て支援新制度 なるほどBOOK」(平成26年9月改訂版) 2014 内閣府・文部科学省・厚生労働省
- (注2) 読売新聞 2015年3月28日 東京版朝刊 p.19
- (注3) 内閣府子ども・子育て本部の「認定こども園」ホームページ (<http://www.youho.go.jp/index.html>) より
- (注4) 筆者は2014年度の1年間、東京学芸大学を拠点とした国内研修の期間を得ることができ、その間にアメリカ・ニュージャージー州とスウェーデンのリンショーピン市の幼児教育施設を訪問する機会を得た。
- (注5) 子どもが活動している場面の撮影はできなかったが、こちらの壁に貼ってある地図は「食べ物の世界のどこからやってくるか」というプロジェクト活動の成果として張り出されていた。スウェーデンではこういったプロジェクト活動を通じた教育・保育を、イタリアのレッジョ・エミリア市の教育に影響を受けている。日本だと小学校の「総合的な学習の時間」に近い活動である。

### 【引用文献】

- 一柳智紀 2009 教師のリヴォイシングの相違が児童の聴くという行為と学習に与える影響 教育心理学研究 57(3), p.373-384
- 請川滋大 2008 幼稚園における「帰りの会」の研究－「帰りの会」の構造分析の試み－ 日本女子大学紀要家政学部 55, p.31-40
- 請川滋大 2009 幼稚園における「帰りの会」の研究Ⅱ－幼稚園教諭に対する質問紙調査から－ 日本女子大学紀要家政学部 56, p.23-34
- 請川滋大 2013 子どもたちとの対話的な関係を築くために－帰りの会を活かした学級経営－幼稚園じほう 2013年9月号, 全国国立幼稚園長会 p.12-18
- OECD(編著) 2011 OECD 保育白書－人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較 明石書店



- 北村友人 2013 国際比較を通じた幼児教育の質に関する考察 平成 24 年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」 諸外国（アメリカ，イギリス，フランス，ドイツ，スウェーデン，ニュージーランド，韓国）の幼児教育施設の教育内容・評価の現状や動向に関する調査および幼児教育の質保証に関する国際比較研究 上智大学 pp.7-16
- 竹本晋也・田中博之 2011 サークルタイムにおける指導法の研究--教科学習・道徳・特別活動での活用法の比較分析を通して 早稲田大学大学院教職研究科紀要 3, p.1-17
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2014 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館
- 寶槻純子 2003 イギリスにおける参加型・参画型教育活動：サークルタイムを中心に 日本教育学会大会研究発表要項 62, p.234-235
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 フレーベル館